研究レポート・論文作成のための経験則とは
―パターン・ランゲージのパイロット作成―

トンプソン美恵子

要旨
自分で文章の問題発見・改善ができる「自律的な書き手」を育てる正課外のライティング支援施設（以下、WC）では、チューターなどの支援者が答えを教えず、相談者による改善の道筋を一緒に考える対話的支援が求められる。しかし、相談者・支援者共に「自律的な書き手」の意義が理解しにくいこともある。筆者は文章作成支援に携わる者が、自分自身の文章作成過程における経験則を自覚することで「自律的な書き手」の要素を認識し、有意義な対話的支援を行うことにつながると考える。そこで筆者は、WC で文章作成支援経験のある大学院生 5 名を対象に、『探究パターン』と呼ばれる探究の経験則を可視化したパターン・ランゲージ（以下、PL）を活用してインタビュー調査を実施し、研究の文章化プロセスにおけるコツを PL 試作版としてまとめた。本稿はその試作版の報告をするとともに、活用の可能性を示す。

キーワード
研究、アカデミック・ライティング、プロセス、自律、ライティング・センター

1. はじめに
昨今正課外のライティング支援施設（以下、WC）を設置する大学が増加しつつある。そこでは、WC が浸透している北米のように文章の最終的な出来よりも自分で文章の問題を発見し、改善に至る方略を見出す「自律的な書き手」の育成が重視される。チューターなどの支援者育成においても、書き手の主導権（authorship）を尊重することが焦点化されている（佐渡島・太田 2013、保田・張 2021）。

しかし、「自律的な書き手」の育成を目指す WC 理念の具現化が難しいこともある。相談者が非母語話者の場合、第二言語の負荷から一方向的な修正を望む者が多い。また、チューターが相談者の期待と WC 理念の間で葛藤を抱くこともあり、書き手自らが改善の方略を見出す「自律的な書き手」の考え方は、北米ほど当然視できない。

こうした課題から、「自律的な書き手」の意義理解という対話的支援に対するレディネス形成を相談者・支援者間で築く必要性が浮かび上がる。チューターは相談者と水平的関係にあり、文章作成過程における経験則を相談者に近い立場から提示できる利点があるという（Gillespie & Kail 2006）。チューターの文章作成に対する知識技能は採用時の前提であり（佐渡島・太田 2013）、チューターは自身の文章作成過程でその知識技能をいつどう活用すればいいか、文章をどう改善できるかを経験的に知っている。つまり、チューターは相談者の一歩先を行く「自律的な書き手」である。このことから、初期段階の対話的支援でチューターの書き手としての経験則を共有することが、相談者が主体的に文章の修正・改善に向き合い、「自律的な書き手」となることを促すと考える。

しかしながら、よい書き手の経験則は明らかになっていない。筆者は「自律的な書き手」としての経験則を可視化し、文章作成支援に組み込むことを目指している。本研究はその第一段階として、WC でチューターとして文章作成支援に従事する大学院生 5 名を対象とし、研究を文章化するプロセスの内省を聞き取り、その経験則の可視化を試みる。

2. 経験則を可視化するパターン・ランゲージ

経験則を可視化するためのツールにパターン・ランゲージ（以下、PL）がある。PL はある分野において繰り返し見られる経験則をインタビューや会話データなどからパターンとして抽出し、パターン名の下状況・問題・解決案を言語化、かつイラストで視覚化したものである（井庭他 2019)。PL は①経験則を明確に捉える「認識のめがね」を提供、②ことばで捉えにくい経験則を具体的な場面や経験と照らして他者と共有、③今後の行動へ応用、などの利点があるとされている。

大森・黒田（2022）は文章作成の対話的支援における経験則を PL で可視化した。大森・黒田はいかに支援するかに注目している。本研究が開発を目指す PL は支援者が文章プロセスの見直しを通じて支援のポイントをつかむことを可能にする他、あらゆる書き手の内省を促す点が特徴と言える。

3. 方法

3.1 調査協力者

本研究の協力者は、国立大学 WC でチューターとして文章作成支援を 1 年程度経験した大学院生 5 名である。5 名のうち 3 名が博士課程、2 名が修士課程に在籍しており、いずれも人文科学系（文学または言語）を専門としている。なお、2 名は日本語非母語話者である。

調査協力者に対し、本研究の目的と概要と PL の定義、個人情報の取り扱いを説明し、同意を得た上で調査を実施した。

3.2 PL 作成の手順

PL は通常以下のような手順で作成される（以下は井庭他 2019)。

①インタビューなどの文字化資料からコツと思われるものを取り出す（マイニング）
②KJ 法によりコツをグルーピングしてパターンの元を作る（抽出）
③抽象化・統合・捨象により全体と各パターンの位置づけを整理する（体系化）
④PL の形で各パターンを文章化する（ライティング・シンボライジング）

筆者は①のインタビューで Creative shift 社が開発した PL『探究パターン』を用い、調査協力者の経験をより効果的かつ効率的に引き出すことを試みた。『探究パターン』は探究に関する 36 の経験則を可視化したカードである。その内訳を表 1 に示す。

インタビューでは、まず 36 のカードに目を通し、研究の文章作成プロセスにおける自身の経験則と合致する（一部分を含む）カードを調査協力者に選んでもらった。続いて、カードを選んだ、または選ばなかった理由、選んだカードから想起した自分の経験、カードにはないがやっていることなどを自由に話してもらった。筆者が適宜質問をしながらインタビューを進行し、インタビューは IC レコーダーで録音した。

表 1　PL『探究パターン』PL 一覧（Creative Shift のウェブサイトより抜粋）

A 課題の設定	興味があること / 心の動き / 片隅に置いて過ごす / 切り口の探索 / 自分なりのおもしろポイント / ナゾの発見 / 未知かどうか / 無理がないか / 何の役に立つか
B 情報の収集	まずは動く / 仮説探偵 / リアルに触れる / でどころチェック / 周辺サーチ / オリジナルの情報
C 整理・分析	とにかく書き出す / 方法の道具箱 / ほかの人の目 / 仮説に対する分析 / 想定外の発見 / 次のサイクル
D まとめ・発表	自分を入れる / 改善ダイアローグ / 徹底的な仕上げ / 発見の共有 / 相手に届く伝え方 / 惹き込む魅力
E 振り返り	成長の振り返り / 振り返りテーブルトーク / 未来へのことば
F チームで取り組む	お互いの活躍ポイント / 納得のステップ / 多様な参加

続いて、インタビューの文字化資料に基づき、上述の PL 作成ステップ②～④を行った。そして、④を基にした研究の文章作成プロセスのふり返りを再度調査協力者に依頼し、ふり返りの内容と PL に対するコメントをメールで返信してもらった。

4.　『研究レポート・論文作成』の PL

前述の過程を経て精緻化した『研究レポート・論文作成』の PL を表 2 に示す。

表 2 研究レポート・論文作成の PL

＊紙幅の都合上、PL カードにある状況・問題の記述、およびイラストは省略

パターン名		解決のヒント
テーマの模索	好奇心のあぶり出し	どのようなことに関心があり、何を知りたいのかを自問自答して探っていく。
	違和感の深掘り	違和感や矛盾に注目し、なぜそう感じるかを考えたり、調べたりする。
	色々なことへのアンテナ	自分の経験をふり返ったり、日常のありふれた現象を観察したりして、研究以外の場面でも面白いと感じることを探してみる。
	情報のシャワー	少しでも関心が持てる資料を読み漁り、様々な情報に触れる。
情報の収集	情報との対話	書き手に対する共感や反論など感じたことを書き留めたり、書き手の背景や意図を探ったり、他の文献の情報と結びつけて考えたりしながら、能動的に情報を読み込む。
	情報源の信用チェック	自分のレポート・論文でどう使えるかを吟味するために、情報源が信頼できるものかをきちんと確認する。
	脇道の散策	調べる範囲をテーマに薄く関連のあることまで広げ、面白いと思う情報を集めて読んでみる。
	頭の可視化	集めた情報について要約したり、気づいたことを書いたりして、頭の中にある考えや情報を整理する。
問いの設定	自分なりの仮説	情報を得たら、結果・結論を予想して自分なりの仮説を立てる。
	方向性の見極め	様々な専門の文献を読み、明らかにしたいことがどの専門領域で、どのような知識や方法が求められるのかを把握する。
	問いの仮設定	自分が明らかにしたいと思うことを問いとして一旦設定する。
	何らかの新しさ	関連の文献を調べ、自分の問いに対する答えがまだ出ていないことを確認する。
	スケールの調整	レポート・論文課題の条件、環境などに応じて、明らかにしたい問いのスケールを調整する。
	世の中とのつながり	明らかにしようとしていることが他者や社会にとっても興味深いか、意味のあるものかを考える。

分析・考察	創造的な情報利用	今まで着目されてこなかった文献を活用したり、情報のつなげ方を工夫するなど、創造的に情報を用いる。
	はずれの探究	仮説と異なることを見つけたら、新たな発見につながるかもしれないと捉え、さらに考えてみる。
	行きつ戻りつ	見えてきたことに基づき新たな仮説を作り、必要に応じて追加の情報収集をしたり、情報の整理を見直したりする。
	他者の視点	書いたことや書きながら考えたことを他者に伝えて批判的に見てもらい、自分が気づかなかった視点を取り入れたり、改善をしたりする。
まとめる	文章のお手本	集めた文献の論理展開や表現をよく観察し、自分の文章作成の参考にする。
	私ならでは	わかった結果をそのまま示すだけでなく、それに対する自分なりの解釈を入れてオリジナリティを出す。
	自分のことば、他者のことば	自分の考えを書いた部分と他の文献で言われていることがわかるように引用し、誰が何を言ったかを明確にする。
	磨き上げの作業	内容を知らない読み手になったつもりで客観的に読み、論の展開や書式、言葉遣いなどを丁寧に確認する。
	畑違いの読者	研究レポート・論文の内容になじみのない他者に読んでもらうことで、わかりやすい文章に改善していく。
	伝えたいことを伝える工夫	聞き手や読み手が関心を持ってくれるように、情報や言葉づかいの工夫をしてわかりやすく表現する。
ふり返り	道筋のふり返り	研究レポート・論文作成の道筋をふり返り、達成できたこと・今回はできなかったことを確認する。

こうした PL により、構想、情報収集、問いの設定、問いをめぐる分析・考察、結果のまとめ、発信といった一連の研究プロセスにおける経験則を認識させる内省が可能になると考える。パターン名を媒介とした文章作成をめぐる対話の活性化も期待できる。

今後は調査協力者をさらに増やし、インタビューでよりボトムアップに経験則を聞き取ることで PL の正式版を開発するとともに、PL を用いた WC でのワークショップやチューター研修を行い、実践での有用性を検証したい。

（トンプソン美恵子とんぷそんみえこ・東京大学・thompson-mieko@g.ecc.u-tokyo.ac.jp）

参考文献

井庭崇・鈴木寛・岩瀬直樹・今井むつみ・市川力（2019）『クリエイティブ・ラーニング―創造社会の学びと教育』慶応義塾大学出版会

Creative Shift（n.d.）「探究パターン―創造的な探究のためのパターン・ランゲージ」＜https://creativeshift.co.jp/product/2344/＞（2023 年 3 月 30 日閲覧）

佐渡島紗織・太田裕子（編）（2013）『文章チュータリングの理念と実践―早稲田大学ライティング・センターでの取り組み』ひつじ書房

保田幸子・張梓楨（2021）「ライティングセンターにおける文章執筆支援―チューターと書き手双方の視点から」『日本語教育』180, 17-32.

GILLEPSIE, P., & KAIL, H.(2006) Crossing the Thresholds: Starting a Peer Tutoring Program, in MURPHY, C., & STAY, B.(eds.), *The Writing Center Director's Resource Book*, Routledge, 321-330.